



福岡市博物館

FUKUOKA CITY MUSEUM

第24回新収蔵品展

ふくおかの歴史とくらし

平成24年11月23日(金・祝)～平成25年2月11日(月・祝)

特別展示室A・B



生松原 元寇防塁跡

一、古代・中世の博多と九州

弥生時代の福岡平野にあった奴国は、後漢光武帝から金印「漢委奴国王」をもらったことで知られます。須玖岡本遺跡D地点からは中国でも類をみない大型鏡(1)が出土し、金印に記された奴国王の数世代前の王の墓と考えられます。

奴国の西にあった伊都国は奴国と並び立つ国です。伊都国の領域にある西区今山では玄武岩を加工した石斧(2)を生産していました。今山産石斧の出土範囲は北部九州各地に広がっています。ブランド品として扱われたのでしょうか。

飛鳥藤原京時代になると筑紫館の鴻臚館が福岡城の場所に建てられ、大宰府の機関として日本の外交と貿易を担いましたが、十二世紀以後は衰退します。代わって貿易拠点となったのが博多で、博多綱首とよばれる中国商人が博多に住して貿易を行いました。

承天寺は一二四二年に博多綱首の謝国明が建立し、聖一国師円爾弁円が開山した臨済宗の寺院で、高麗仏画の楊柳観音菩薩像(5)は国際性豊かな中世都市博多の信仰の姿を今に伝えています。

承天寺に参じて出家したのが乾峯土曇です(6)。一二八五年に博多に生まれ、承天寺の南山土雲に学んだ後、京都五山や鎌倉五山を歴住するなど鎌倉時代から南北朝にかけて活躍しました。

蒙古襲来以降、博多の貿易の担い手は博多綱首から日本人商人に移り、後に博多豪商ともよばれる有力な博多商人の誕生へつながります。唐津焼は、十六世紀

に朝鮮半島の技法をもとに肥前国で生産が始まったやきもの(3)で、博多遺跡群から出土し博多商人にも愛されていたことがうかがわれます。

一五四九年にキリスト教が日本に伝わり、その後布教が進む中で博多にもキリシタンが誕生しています。豊臣秀吉のバテレン追放令以後、博多のキリスト教は衰退しますが、キリスト教が広がった九州では仏教とキリスト教が習合した新たな信仰形態も生まれています(4)。

二、黒田家と福岡藩

黒田孝高(如水)は織田信長の死後、羽柴秀吉に仕え四国攻め(25)や九州平定などで軍功をあげ、豊前国・中津城主となり、息子の長政は秀吉死後、徳川家康に接近し関ヶ原での功績で筑前国を与えられ初代福岡藩主として江戸時代の福岡の基礎を作りました(26)。この二人を支えた黒田一成、桐山丹斎、益田与助など二十四人の功臣を黒田二十四騎といひ、江戸時代中期には顕彰の対象となり盛んに二十四騎図(7)が描かれました。

益田与助は十八才で黒田孝高に仕官し、最初は台所の水くみ役でしたが戦陣で数多くの武功を上げ、筑前入国後は鉄炮組頭となり禄高三千石という出世を遂げました(8)。

桐山丹斎は黒田家四代に仕え、筑前入国後は山家宿の代官を勤め冷水峠の開通に尽力しました。丹斎以後の桐山家は本家や市郎太夫家(9)など数家に分立しました。

黒田一成は父が有岡城に幽閉された孝

高を助けた縁で、長政と兄弟同然に育てられました。二十四騎中最も長生きし、二代藩主・黒田忠之に従い島原の乱にも従軍しています。朝倉市の三奈木に居を構えたため、その家系は三奈木黒田家(10)とよばれ、代々福岡藩の筆頭家老を勤めました。

島原の乱に従軍した村尾蔵人は長政に近い立場でしたが、忠之時代には知行を長政の遺言より少なく押さえられる(11)など不遇な扱いを受け、後に村尾家は福岡藩から去っています。

福岡藩三代藩主・光之はそれまでの武断政治を文治政治へと移行し、財政再建などを行った名君として知られますが、嫡男・綱之(12)を廃嫡して東蓮寺藩を継いでいた三男・綱政を後継ぎに定めるなど後継者問題も起こしています。

四代藩主・綱政の時代には、福岡藩と佐賀藩との間で背振山の国境争いが起こりました(27)。この争論は幕府の裁許によって肥前側の全面勝利となり、筑前と肥前の国境が画定しました(13)。綱政は絵画を愛好したことも知られ、福岡藩御用絵師である狩野昌運(28)から絵を学び、自ら筆を執っています(29)。

黒田孝高が葬られた崇福寺は黒田家代々の菩提寺となりました。あまたの黒田家の法要が執り行われ、法要には錦や唐織で荘厳具があつらえられました(24)。日本に伝来した最初の錦は経錦(23)でしたが、奈良時代頃緯錦に変わり、国産化されるようになります。そして平安時代の文様織りの技法を発展させたのが「唐織」であり、江戸時代には能

装束に盛んに用いられました。

江戸時代では島原の乱以後、大きな戦乱は起こりませんでした。各藩士は兜や具足(14・15)の手入れを怠らず、武芸を磨き常に有事に備えていました。

福岡藩では、宝蔵院流槍術高田派の祖、高田又兵衛吉次の次男が師範家として仕え(16)幕末まで伝わりました。安政年間(1854-1860)に槍術師範役・井上兵左衛門に学んだ安永又兵衛は九州各藩を他流試合してまわり、その対戦人数はのべ五百五十人に及んだといえます(17)。

黒田長政の三男・長興が立藩した秋月藩では以心流が剣術の一流派として採用され、幕末頃は松村美成が剣術師範役をつとめていました(18)。

江戸時代の長崎は西洋や中国との貿易港であり、海外の医療や文化・芸術が流入する場でした。塚本家は、長崎で医師をしていた塚本道庵の時代に光之の持病を治療したことを期に黒田家に仕えます。その後、代々外科の筆頭として歴代藩主の治療に当たるとともに、多くの学者や文人と交流をもちました(19)。

また、長崎には中国やオランダから新様式の絵画が流入し様々な画派が興りました。これらは総称して長崎派(20)と呼ばれ、九州から中央へと舶来の新画法を伝えました。

江戸時代の都市には町役人とよばれる町人の組織があり、福岡ではその筆頭は年行司と呼ばれ、福岡城下の自治の一翼を担いました(21)。

福岡の町人出身の歌人に大隈言道(おほせのちかひ)がいます。薬院の商家に生まれ、幼年より歌

と書を二川相近に学び、今泉の池萍堂に隠居して作歌活動を行いました。存命中は認められませんでした。その作品は近代以後高く評価されました(22)。

### 三、山笠と博多のくらし

町人の町博多に伝わる最大の年中行事が櫛田神社に奉納される博多祇園山笠です。山(山笠)には飾り山と昇き山があります。飾り山は博多人形によって時代の情景を華麗に描いた山で(30)、昇き山は担いで走るための山です。江戸時代には飾り山がそのまま昇き山でしたが、明治になって電信線を架設するため高い山笠が昇けなくなり、据えたままの飾り山と昇き山に分かれました(31)。

山を昇くときに着る水法被(32)に対して当番町をつとめる時に新調する長法被は当番法被とよばれ、町名を伝統的な緋文様で表現しています(33)。どこの町の所属であるかが一目で分かるとともに、結婚式に着用できるなど晴れ着の役割も果たすものです。

博多の商家では主婦はごりよんさんとよばれ、山笠などの数多くの行事にかかりきりで留守がちな男性に代わり家を支えていました。結婚に際して娘さんは、清み酒といって酒と鯛を受け取り鯛を調理してお返しする儀式を経て、嫁御風呂敷(34)を手に、数々の道具(35)を持って嫁入りし、若ごりよんさんとなつたそうです。

### 四、博多の「名物」

博多織は福岡藩の特産品として保護育



博多祇園山笠模型 (30)

成された絹織物で博多を代表する工芸品の一つです。一八九一年に中西久吉から中西博多織工場を継いだ初代金次郎は、各地の織物技術を取り入れながら多くの技術開発を行いました(36)。

洋服の普及による博多織男帯の需要減少に対して、独特の風合いを持つ「博多涼し」(37)の生産も行い、博多涼しは昭和初期にかけて夏用の着尺地として普及しました。

金次郎の精神は中西家に受け継がれ、初代金次郎の四男金作は電気紋織技術を開明し、タペストリー(38)や肖像画(39)といった全く新しい博多織を生み出し、六男十二夫は博多祇園山笠を描いた帯地(40)などを創作しています。

また、軽くて締めやすいウール製の六花帯(41)は昭和四十年代に爆発的に売れました。

このように博多織の発展と共にあった博多織元中西家ではちゃんちゃんこ(42)や人形(43)にも博多織が使われ、毎日の暮らしに博多織が身近であった様子が目に浮かびます。

博多人形の名前は一八九〇年の内国勸業博覧会に白水六三郎(みづくろくさぶろ)が出品した際の賞状に「博多人形」と記載されてから一般化したといわれています。白水に学ん

だ小島与一は一九二五年にパリ万博で銀賞を受賞し、博多人形を世界に広く知らしめました。以来小島は八十八才で亡くなるまで数多くの優れた博多人形を世に送り出しました(44)。

博多にわかには半面をかぶり、博多弁でしゃべる話芸です。今でも盛んに行われていますが、戦前はプロのわか師がいるほど盛んでした。平田波月(ひらたなみづき)はプロのわか師として演じつつ、多くのわか師の脚本を残し、博多にわか存続につくしました(45)。

また、博多の言葉遊びに「博多謎々」があります。「謎」ともいわれ、一つの謎掛けに対して、その場で謎解きをして口上する遊びです。博多言葉を使い、二つ以上の言葉を掛け、同音で違う言葉を使うのが決まりでした。優秀なものは書きとめられ巻物として残されることもあったようです(46)。

筑前琵琶は江戸時代以前より筑前地方で行われた盲僧琵琶「くずれ」を元として、明治時代中頃、福岡で改良され、全国的に流行した芸能です。筑前琵琶には女性弾奏家が多く、戦前の博多では一丸旭菊(いちまるあさく)らが人気を博しました。

二十世紀に入ると円盤式レコードが普及し、博多にわかや筑前琵琶といった博多の芸能もレコードに吹き込まれ(48)、大衆に愛好されるようになりました。

工芸や芸能だけでなく「博多の者」も博多の名物といえるでしょう。「博多の者」は、口は悪いが、義理堅く、開けっぴろげで情にもろいと言われます。自由民権運動の立場から政治を風刺した





五絃琵琶 (47)

オツペケペー節で知られる川上音次郎は博多生まれで自由奔放ながらも義理堅く(49)、明治を代表する「博多の者」です。

一方、明治大正期に福博の名物男と称されたのが「箱崎ツンちゃん」こと大神常吉です(50)。県内各地の娘たちの氏名、年齢、特徴などを調べ上げ、その一覧を番付として発行し評判を得ました。

## 五、日常の暮らしと共にあるもの

福岡・博多は北部九州の商業・政治の中心となる「都市」であり、血縁ではなく地縁に基づいた自治的な「マチ」の暮らしが営まれていました。マチには職人や商人の暮らし(51)があり、新しい人やモノ(52)が常に集まってきました。

法被はかつてマチではごく日常的に用いられる衣服でした。しかし、新たな仕事にかかる際には法被を新調して(53)気持ちを引き締め、祭りでは普段別々に暮らす住民がその町に由来する文字の入った法被(54)を纏って結束を高めるといった精神性が込められた、ハレの日の衣装でもありました。

福岡・博多の人びとからあついで信仰をうける太宰府天満宮では、新春の一月七

日に参加者が暗闇の中で「木うそ」を交換しあうことで一年の嘘を誠と取り替えるという「鷺替え」が行われます。この神事は太宰府天満宮から波及して全国の天満宮や九州各地の神社で行われていますが、縁起物の「木うそ」は各神社によって様々な形をしています(55)。

一方、福岡の農家では二月と十一月の初丑の日に豊作を祈る「丑祭」という行事があり、この両日には竈や白の上に半箕(56)を置き、餅などを供えます。半箕はムラの日常道具ですが、正月や丑祭などハレの日にも用いられました。

福岡に暮らす人々は川や池で、色々な魚を様々な方法でとってきました。中には自分なりの工夫を重ねながら日常の楽しみとして魚をとり続ける名人もいました。かつての室見川は魚が豊かで、名人たちは投網(57)を打ってアユをとったり、泥の中に隠れるウナギを鰻掻き(58)で捕まえたりしていたそうです。

また、玄界灘を望む福岡には古くからウラ(浦)に住み、海を日常の基盤とする人びとが暮らしていました。「板子一枚下は地獄」というように漁は危険な仕事であり、ウラの人びとは船や漁の道具(59)を大切にしていました。そして安全祈願のため、船の守護神である船霊(60)を帆柱の付け根に祀り、航海・海上の守護神である住吉神社へ船単筒(61)の奉納を行うなどしました。

## 六、明治大正昭和の世相と福岡人

一八七一年に廃藩置県が行われ、福岡藩は福岡県となります。そして明治政府

は「地租改正」を行うため、土地の広さや値段を確定させる検地を各郡の戸長に行かせます。検地で作成した絵図面を清書したのが野取帳(62)で、これを基に土地・租税改革が進められました。

明治政府は軍隊の近代化も推し進め、一八七三年には徴兵令を布告し国民皆兵をめざすとともに、フランス式の大陸型陸軍(63)を建設しました。

金子堅太郎は最後の福岡藩主・黒田長知が海外留学する際に十八才で随行者に抜擢された秀才です。帰国後は藩校修猷館の復興を黒田家から託され、一八八五年「英語専修修猷館」を開校させます。

その後、伊藤博文の信頼を得、明治憲法の起草に当たる(64)など日本の近代化に貢献しました。

幕末の勤王運動の弾圧や、福岡士族の反乱「福岡の変」などで多くの人材を失った福岡では明治初期こそめだつた活躍はありませんが、明治十年代の自由民権運動では日本の憲政発祥の地といえるほどの運動の高まりを見せます。

民権結社向陽社を母体に、平岡浩太郎・箱田六輔・頭山満らが、明治十二・三年頃設立した結社が玄洋社です。頭山満(65・72)は西新町生まれで、その後も自宅を西新町に構えています(66)。

やがて玄洋社の活動は国内活動からアジアの革命へと移り、頭山は玄洋社の中心として金玉均・孫文・ボースラアジアの革命家たちを支援します。玄洋社社員がおこると、すぐに革命軍に参加し辛亥革命を援助しています。

この時代は多くの福岡人がアジアへの関心をもち、一八九〇年に荒尾精が、貿易実務者養成を目的とした教育機関「日清貿易研究所」を上海に設立しますが、その合格者に福岡出身者が多くいました。向野堅一もその一人で、向野は日清貿易研究所を卒業後、日清戦争で通訳官を勤め、戦争後は大陸で商業活動に従事し、満州の実業家・財界指導者として活躍しました(74)。

また玄洋社は敷地内に附属の柔道道場「明道館」を設け青少年を指導しました。第三十二代首相の広田弘毅(68)や、大正・昭和期のジャーナリスト・政治家である中野正剛(73)は修猷館時代に明道館で柔道を学んでいます。

明治後期から昭和戦前期にかけて福岡の町並みも変わり近代的な市街地が形成されました。一九二七年には博多港で「博多築港記念大博覧会」(69)が盛大に開催されました。

しかし、昭和六年の満州事変勃発以後の「十五年戦争」期には、日常の中にも徐々に戦争の影が感じられるようになります(70)。戦争末期には徴兵検査合格者の八割近くが現役入営し、出征していききました(71)。福岡都市部も一九四五年六月十九日の「福岡大空襲」で焼け野原になってしまいました。終戦の翌年の一九四六年一月玄洋社はGHQ指令により解散しました。

戦後「博多っ子」はすぐに復興に立ち上がり、約二十五万人だった福岡市の人口は、現在百四十九万人を数え、九州最大の都市となっています。

出品資料一覧（文中資料のみ）

- 一、古代・中世の博多と九州
- 波多野聖雄資料（追加分）
- 1 鏡片（須玖岡本遺跡D地点）
- 大内士郎資料（追加分）
- 2 今山石斧・未製品
- 柴田愛子資料
- 3 窯道具と絵唐津
- 中村政義資料
- 4 菩薩形交脚像（伝マリア観音）
- 寄託承天寺資料
- 5 楊柳観音菩薩像 甲・乙本
- 6 乾峯土曇墨蹟「直指人心」

- 松村縁資料（追加分）
- 18 印章
- 塚本家資料（追加分）
- 19 蘭図
- 井手亮資料
- 20 虎図
- 佐藤太兵衛資料
- 21 駕籠
- 松田房徳資料
- 22 和歌短冊
- 大和豊治資料
- 23 藤ノ木古墳出土経錦復元品
- 寄託崇福寺資料（追加分）
- 24 打敷
- 25 羽柴秀吉朱印状
- 26 黒田長政書状
- 27 背振山公事書物
- 28 群馬図巻
- 29 富士図
- 三、山笠と博多のくらし
- 宮徹男資料（追加分）
- 30 博多祇園山笠模型
- 小川峰登資料（追加分）
- 31 写真（追い山）
- 三浦悦子資料
- 32 山笠水法被
- 大塚定男資料
- 33 博多祇園山笠下洲崎当番法被
- 笠順子資料
- 34 嫁入り風呂敷
- 石村鸞子資料
- 35 重箱

- 中西裕子資料
- 38 タペストリー
- 末次栄子資料
- 39 電気紋織肖像画
- 田中岱子資料
- 40 帯地
- 安松奈津子資料
- 41 六花帯
- 溝上理江子資料
- 42 ちゃんちゃんこ
- 生島ハナ資料
- 43 人形
- 木村節夫資料（追加分）
- 44 人形「ベープ・ルース」
- 田中龍一資料（追加分）
- 45 色紙「にわか」
- 柴藤清吉資料（追加分）
- 46 謎秀逸之巻
- 一丸俊憲資料（追加分）
- 47 五絃琵琶
- 池田善朗資料
- 48 SPレコード
- 中野君栄資料
- 49 書簡（近況報告）
- 大神皓資料
- 50 大神常吉肖像
- 五、日常の暮らしと共にあるもの
- 森田愛子資料（追加分）
- 51 製麵機
- 伊藤信博資料
- 52 手動按摩機
- 石田貞利資料
- 53 法被「水だき新三浦」
- 荒巻セツ子資料（追加分）
- 54 子供用法被「本町」
- 村上陽三資料
- 55 登立天満宮の板うそ
- 大内士郎資料
- 56 半箕

- 西嶋榮二資料
- 57 投網（トアミ）
- 毛利通友資料
- 58 鰻掻き（ウナギカキ）
- 進藤一馬資料（追加分）
- 59 浮標
- 松田又一資料（追加分）
- 60 船霊
- 殿上正光資料
- 61 船管筒
- 六、明治大正昭和の世相と福岡人
- 齊藤弘昭資料
- 62 現反別野取張 十八番
- 清水貞和資料
- 63 軍服・勲章
- 渡邊英典資料
- 64 書「憲章五十年・・・」
- 原孝彦資料
- 65 書「至誠即是神」
- 西新公民館資料
- 66 頭山満先生宅楠木の前で
- 衛藤ハルミ資料
- 67 書跡「以義為利」
- 竹中宏幸資料（追加分）
- 68 書「興亜」
- 重松珠子資料
- 69 重箱（博多築港記念大博覧会）
- 山崎啓司資料
- 70 読売ニュース焼付版
- 重松一資料（追加分）
- 71 認識票
- 寄託社団法人玄洋社記念館資料
- 72 書「天下紛々乱如麻鍊磨肝胆独成仁」
- 73 書「豪傑之士雖無文王尚興」
- 寄託向野堅一資料
- 74 鳳凰牡丹団花文様掛

石田聖一、石村鸞子、一丸孝憲、井手亮、伊藤信博、猪野隆平、衛藤ハルミ、大内士郎、大神皓、大塚茂喜、小川京子、小河キヨ子、笠順子、加藤明道、嘉村義子、木村和男、木村忠夫・程島留美子、桐山弘士、黒田雪恵、向野淳二、小林茂春、齊藤弘昭、佐藤太兵衛、重松一、重松珠子、柴田愛子、柴藤清吉、清水貞和、社団法人玄洋社記念館、宗教法人承天寺、宗教法人崇福寺、進藤勇、末次栄子、竹中宏幸、田中岱子、田中龍一、塚本哲也、塚本潔、殿上正光、中西金三郎、中西裕子、中野君栄、中村ミチコ、西嶋榮二、西新公民館、波多野聖雄、原裕子、星野宜義、益田敏夫、松田房徳、松田又一、松村縁、三浦悦子、溝上理江子、宮徹男、村尾俊郎、村上陽三、毛利通友、森田愛子、山崎啓司、大和豊治、安松奈津子、吉野忠記、渡邊英典

福岡市博物館では考古・歴史・民俗・美術の博物館資料の収集を行っており、その成果を公開するために、新収蔵品展を開催しております。第24回目の今回は平成20・21年度に収集し、整理と調査を終えた3430件の資料の中から約220件を紹介いたします。

新収蔵品展の開催にあたり、貴重な資料をご提供下さいました皆様には厚く御礼を申し上げます。

ご協力いただいた方々  
（寄贈・寄託者名／五十音順敬称略）  
荒巻セツ子、生島ハナ、池田善朗、

福岡市博物館 〒八二一〇〇〇一  
福岡市早良区百道浜三丁目一番一  
☎〇九二・八四五・五〇一一